

# 05

宮城県本吉郡  
南三陸町

一般社団法人復興みなさん会

## 被災者のニーズに寄り添い続けた10年間

津波により甚大な被害を受け、町民が町内外に散らばって避難生活を送らざるを得なかった南三陸町。自らも被災しながらコミュニティの再生に立ち上がったのが、復興みなさん会だ。仮設住宅・復興公営住宅でのコミュニティ作り、行政と住民の橋渡しなど幅広い役目を担い、現在も精力的に活動を行っている。

### 取組のPOINT

ヒト 被災当事者が活動の主体に

着眼点 復興を「自分ごと」に

連携・協働 幅広い主体と連携

持続性 変化を続けるニーズに対応

### DATA

取組主体 一般社団法人復興みなさん会

取組内容 多様なコミュニティの再生

人物紹介 代表理事 後藤 一磨 (ごとう かずま)



宮城県本吉郡南三陸町戸倉出身。高校卒業後、銀行員、県議秘書等を務めた後、グリーンツーリズムインストラクターや民泊運営などを行う。東日本大震災で被災し自宅流失。2011年、復興まちづくり推進員としての活動をきっかけに、仲間と「復興みなさん会」を設立し代表理事就任。

### ヒト 被災当事者が活動の主体に

#### 仮設住宅入居者の情報を足で集めることから

一般社団法人復興みなさん会の中心メンバーは、いずれも被災当事者だ。代表理事の後藤一磨(ごとう かずま)さんは戸倉地区、理事の及川清孝(おいかわ きよたか)さんと畠山幸男(はたけやま さちお)さんは歌津地区、工藤真弓(くどう まゆみ)さんは志津川地区にそれぞれ家があったが、津波で流失した。

4人は避難所で暮らしていた2011年の夏、宮城県の委託により宮城大学が行った「コミュニティ復興支援員設置実証業務」により雇用され、「復興まちづくり推進員」としての活動を始めた。自らも被災者でありながら負担の大きな役目を負うことについて工藤さんは「生き残った者として何かやらねばという思い。自分たちの町ですから」と話す。4人はこれを機に結束し、同年10月被災した町民による任意団体「復興みなさん会」を設立した。

そのころ2011年秋にかけては、避難所から二次避難所、仮設住宅と生活の拠点が移っていく時期であった。その中で、元の地区・集落単位のつながりがバラバラになり、それまでのコミュニティが維持できず、住民が互いに分断された状態となっていった。

そういった状況の中で、最初に取り組んだのは仮設住宅マップ作りだ。南三陸町では入居者が抽選で決まった仮設住宅も多く、入居時点では、周りは知らない人ばかり、知人がどこにいるかわからないという方が多く見られた。個人情報保護の観点から誰がどこに住んでいるという入居者情報は提供されず、集会施設の建設も遅れたところが多かったことも重なり、仮設住宅でのコミュニティ形成はなかなか進まなかった。

このような状態が長期化すると、被災者の孤立がより深まる恐れがあったことから、復興みなさん会では設立直後から仮設住宅内のコミュニティづくりに取り組むようになった。最初の取り組みとして仮設団地の住宅を1戸1戸訪問し、掲載許可を得られた世帯主の名前と元の地区名を載せた仮設住宅マップを制作した。自らが入居した仮設住宅団地約300世帯を2ヵ月がかりで回った工藤さんは「掲載拒否する方はほとんどなく、むしろ『こういう情報がほしかった』と喜ばれました」と振り返る。



花壇の花植え (2013/6/9 平成の森仮設住宅)

### 仮設住宅内のコミュニティ活動を継続的に支援

仮設団地内で互いの顔が見えるようになると、仮設住宅内でも自治会が生まれてきた。2013年度にかけ、自治会と連携して集会所等でお茶会を開いたり、花壇で花植えをしたり、芋煮会等の季節行事を催したりと、入居者が参加しやすいようさまざまな形のイベントを企画した。2014年度以降も、徐々に減っていく仮設住宅入居者と周辺住民と一緒に交流できる機会を提供したり、これまで「引っ越し」をしたことがない入居者が多かったことを受け、仮設住宅から引っ越しをする際に必要な手続きを1つ1つ確認できる場を開催したり、内容を工夫しながら伴走支援を継続した。

これらの交流事業は、町の復興について正しい知識を得て復興への想いをみんなで共有する「復興てらこ屋」や、南三陸町の風土・文化・生活に根差した「椿」をテーマとしたまちづくり活動「南三陸椿ものがたり復興」、復興公営住宅のコミュニティづくりに向けた活動などに展開していくこととなった。

## 着眼点 復興を「自分ごと」に

### 住民同士で学び考える「復興てらこ屋」

仮設住宅の支援と並行して、なかなか具体像が見えてこない町の復興を住民主体で考えていくため、2011～13年にかけて先進事例に学ぶ機会として、新潟県中越地域、北海道奥尻町、阪神地域等へ視察研修を実施。各地の被災者の経験を聞いたり、復興のあり方について学んだりし、地元でどう生かすべきかを考えを深めた。また宮城県内の他の被災地との情報交換や合同研修も積極的に行った。

仮設住宅での生活が落ち着いてくると、町の復興計画や将来像が見えてこないことに対して住民の不安が広まり始め

た。そこで会は、2011年12月から「復興てらこ屋」を定期的に開催。当初は過去の被災地の経験を聞く会や、町民どうしで復興について語り合う会などを通して思いを共有することからスタートし、町の復興計画が定まった後は、計画の内容について行政から直接説明を受け、それぞれの事業について議論し意見を出していくといったように、復興を「自分ごと」として考える場へと変化させていった。



復興てらこ屋「神戸の復興から学ぶ」(2012/3/1南方仮設住宅第1集会所)





椿のお花見バスツアー（2016/3/28 南方仮設住宅の方対象）

## 椿を活用し楽しみながらまちづくり

町民が楽しみながら積極的に復興に関わる活動として、復興でらこ屋の場から生まれたのが、地元の椿を活用する「南三陸椿ものがたり復興」だ。椿は南三陸に昔から自生するなじみ深い植物で、数十年前までは油をとって料理に使ったり、髪油にしたりするなど生活に欠かせないものだった。「復興やまちづくりの話題は敬遠しがちな女性や高齢者も、椿がテーマのお茶会なら進んで参加してくれるんです」と工藤さん。椿がテーマの「椿はな咲くまちづくりお茶会」を開催し、その後半に役場などから復興公営住宅の建設、といった復興に関する情報提供をしていただくようにした。

さらに椿でできること、したいことを出し合い、2012年から将来の津波からの避難路沿いに目印として椿を植える「椿の避難路づくり」や、椿のお花見バスツアー、椿油料理体験会、椿の種拾い・苗作りなど多様な活動を展開している。特にけんちん汁など椿油を使った料理は、高齢者に懐かしいと喜ばれたそう。2020年に完成した復興祈念公園には、住民が種から育てた苗木を含む椿43本を植樹した。

連携・協働

## 幅広い主体と連携

### 住民との懇談会に町と協働

南三陸町内には8地区738戸と多くの復興公営住宅が整備されたが、そのコミュニティ形成にあたっては、入居前からの交流支援が重視されてきた。その背景には大きく2つのきっかけがあった。

1つは、復興みなさんが主催していた「椿はな咲くまちづくりお茶会」に、役場や整備の現場を担ったUR都市機構の方が頻繁に参加されるようになったことだった。「被災した人たちが生き生きと町の未来を語り合うお茶会は、役場が開く復興事業説明会とはまったく違う雰囲気。柔軟にコミュニケーションを取りながら進める手法の良さを、役場の人にも感じてもらえたと思う」と後藤代表。

もう1つは、町民有志が議会に提出した「南三陸町の災害

復興公営住宅におけるコミュニティ再生に配慮した管理体制への陳情書」。「椿はな咲くまちづくりお茶会」の中で、町民からの要望として多く聞かれた「見守り事業」など、ソフト面での管理体制の整備を求めるこの陳情書は2013年6月定例会で採択された。

これらを踏えて町は、2013年10月から復興公営住宅入居予定者を対象に「くらしの懇談会」を開催、その中で復興みなさんは「お茶っこタイム」の運営や意見の聞き取りを担当し、参加者がリラックスして話しやすい場作りをサポートした。

並行して2014年度からは、復興みなさん会としても、民間助成財団等の支援を得ながら、復興公営住宅のコミュニティづくりの活動を展開するようになった。

### より多くの住民を復興の担い手に

復興みなさん会の活動の大きな目的はより多くの町民に復興のプロセスに関わりを持ってもらい、新しい町の担い手になってもらうことだ。そのために段階を踏んで支援を行った。

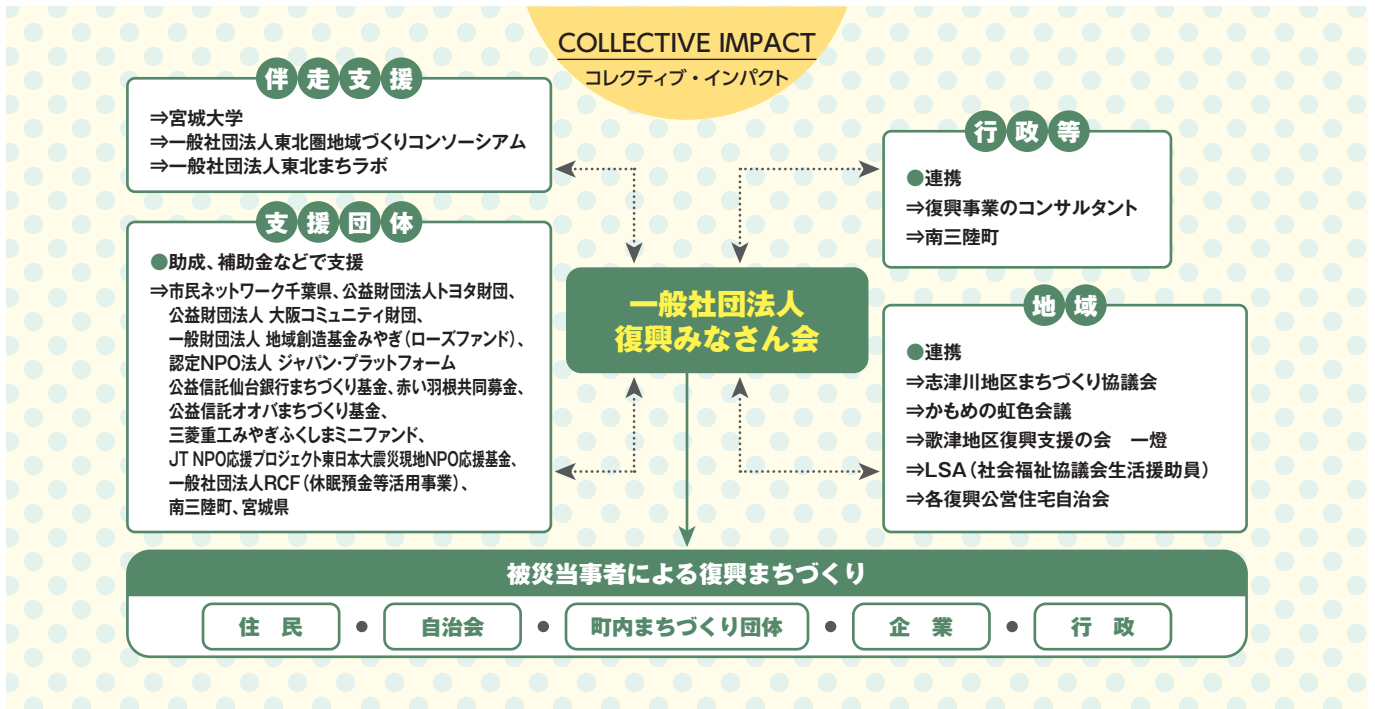
例えば復興公営住宅への入居が進む時期には、入居前から住民どうしが交流できるお茶会を開き、入居後は自治会の設立、運営もサポート。そうしながら、課題を自治会内で解決したり、住民主導でお茶会を開いたりという自主的な動きが生まれるようサポートした。住宅周辺の地域情報をまとめたマップを作って配布したり、自治会がなかなか立ち上がらなければその間も住民の交流が途切れないようサポートを続けたり、それぞれのケースに寄り添った柔軟な支援を行った。



七夕飾りつくり交流会（2017/7/27 志津川中央復興住宅）

### 連携・協働を団体の強みに

これらの取り組みを、復興みなさん会は官民さまざまな連携先と協働して展開してきた。前述の通り、会は宮城大学が被災当事者を復興まちづくり推進員として配置したことをきっかけに誕生した。宮城大学の支援が3年間で終了した後、2014年に一般社団法人化してからは、一般社団法人東北圏



地域づくりコンソーシアムの伴走支援を受けている。コンソーシアム事務局長の高田篤さんは、NPOや市民活動の専門家として会の発足当初から助言とサポートを続ける。

町内では、復興公営住宅内での活動に関して各自治会や社会福祉協議会LSA（生活援助員）と日常的に連携する。「歌津地区復興支援の会 一燈」とは、歌津地区に関する復興や課題の情報共有・活動連携を行っている。また、復興祈念公園の活用に関しては「かもめの虹色会議」「志津川地区まちづくり協議会」等の市民団体とともに取り組んでいる。

## 持続性 変化を続けるニーズに対応

### 震災復興祈念公園を官民協働で活用する

復興みなさん会の活動は、復興の進捗や町民の暮らしの課題の変遷によって常に変化してきている。発足当初から常に、町民の困りごとや知りたいことを当事者目線からくみ取り、メンバーで共有し、行動してきており、これからもその方針は変わらない。

2020年秋、町内中心部・志津川地区の津波被災エリアに「南三陸町震災復興祈念公園」が完成した。これに合わせて、同会など町内の各団体と行政が協働して「さんサポートプロジェクト」を始動し、「公園と周辺一帯をどう活用できるかみんなで考えよう」と町民に呼び掛けている。「祈りと鎮魂の場というイメージだけでは関心が高まりにくい」と工藤さん。「でも、公園が持つ多様な要素や役割を“見える化”すれば自分と公園の関係性が生まれ、身近になるはず」。祈念公園を軸に、町に点在する活動が連携していくことを、メンバーは期待する。

### 復興の歩みを丁寧に記録する

他にも、復興事業により地形から大きく変わってしまった志津川地区を対象に、震災前と現在の地図を重ね合わせる「今昔マップ」作りが進行中である。また、2014年から毎月発行していた「復興まちづくり通信」は、2021年5月から「南三陸 汐風便り」としてリニューアル。今後も町内外へ復興や住民活動の情報を届ける。

来年度以降の計画としては、被災から復興へのプロセスをまとめたQ&A集を制作予定という。当時苦労したことやどう乗り越えたか、やってよかったこと、教訓など、被災した町民の貴重な経験を後世に残す取り組みだ。被災者だからこそ持てる当事者目線で寄り添い、ともに考え、行動してきた同会は、南三陸町の復興とその先を見据えこれからも活動を発展させていく。

**本事業例の問い合わせ先**

**一般社団法人復興みなさん会**  
 宮城県本吉郡南三陸町志津川字上の山26  
 (上山八幡宮社務所内)  
 E-mail : minasan.msrk@gmail.com  
 HP : <http://tohokuconso.org/common/minasan/>

東日本大震災により甚大な被害を受けた南三陸町で、被災した町民同士の絆の再生やコミュニティの再構築など、復興に向けたまちづくりの支援活動を行っている。